“ By Love Serve ”

名古屋柳城短期大学

ちゃぺるにゅーす

第 33 号　2019 年 12 月 18 日

目　次

巻頭言「希望に生きる～星に導かれて～」チャプレン　主教　大西修・・・・・・2
＜前期の礼拝から＞
「エバが最初に蛇にそそのかされたからなの？」司祭　後藤香織・3

＜後期の礼拝から＞
「子どもがいるところに生まれる笑い」教授　村田康常・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
「村人と共に～痛みが情熱へ～」アジア保健研修所（AHI）研修生　チャン・レイ・・・・・5
「なぜ、ハムスターを飼い続けるのか」准教授　榎戸裕子　・・・・・・・・・・・・・・・・6
「柳城生の皆さんへ！合言葉は『ニコニコ！ハキハキ！キビキビ！』」
教学部長　大澤弘毅　・・・・・・・・・・・・・・・・7
「創立１２１周年記念礼拝」准教授　大崎千秋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

クリスマス展を開催しています　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
新刊の紹介　・・・11

巻頭言
「希望に生きる
～星に導かれて～」
チャプレン 主教 大西修

澄み渡った冬の夜空を見上げると、美しく輝く無数の星に目を奪われます。そんな時、ふと思い出すのは、「小さな星の小さな光が、ささやかな幸せを歌ってる」と、坂本九が歌った 1963 年のヒット曲「見上げてごらん夜の星を」です。

聖書には星がわたしたちに幸せを告げ知らせるものとして、たびたび描かれています。創世記 1 章では神が天地創造の 4 日目に太陽と月と星を造られ、地を照らさせ、太陽には昼を、月と星には夜を治めさせられたと記されています。暗闇を照らす光の一つとして星があります。神はアブラハムに「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」と、子孫の繁栄を約束されました。(同 15 章) 星は人々に希望を与え、夢を膨らませ、生きる喜びを与えます。

マタイによる福音書 2 章では、星がイエスの誕生（クリスマス）の出来事の中に現れ、重要な役割を果たしています。東方の占星術の学者たちはユダヤ人の王としてお生まれになった方を探し求め、王の誕生を告げ知らせる星に導かれて、はるばる 1000 キロを越える長い旅の末、ようやくエルサレムにたどり着きます。ヘロデ王の前で「わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」と語ります。その後「東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」その場所はユダヤのベツレヘムの小さな家でした。彼らは家に入り、幼子をひれ伏して拝み、贈り物を捧げました。この光景こそクリスマスの出来事のクライマックスです。

聖書に出てくる星は、私たちが願うささやかな幸せをも包み込むはるかに大きな幸せをもたらすもの、人知を超えたものを指し示しています。アブラハムは思いがけない神の遠大なご計画に恐れおののきつつ、星を見つめ、希望をもって生活しました。そこに人類の繁栄という神の確かな約束が実現したのです。

占星術の学者たちは、絶えず見上げていた夜空に輝く一つの星を遂に見つけ、その星に導かれ、彼らの生涯をかけて、王に出会うために想像を絶する過酷な旅へと突き進んでいきました。来る日も来る日も果てしなく続く長い砂漠や荒野での道中、筆舌に尽くしがたい多くの試練に遭遇し、「もうだめだ、これ以上先へは進めない、戻るしかない」と幾度考えたことでしょう。そのたびに彼らは、行く手を指し示す星の導きに勇気づけられ、ついに王に出会うことができたのです。この星こそ、希望の星であり、夢を実現させる導き手としての星でした。準備し、携えてきた王への贈り物とは、思いと言葉と行いのすべてが込められている彼らの命・人生そのものでした。彼らの夢は王に出会い、自分の命・人生を王に捧げることによって、新たな希望に満ちた生き方が与えられることにありました。自分の命・人生を捧げても惜しくない王の存在、その王に出会うための旅は過酷な試練と自分自身との闘いでもありました。その旅は自分を信頼し、自分のことだけを考える生き方からの旅立ちであり、自らを生かしてくださっている方へ目を向ける旅でもあったのです。ですから、目標のある日々は、たとえ困難な出来事があってもそれを乗り越える力が与えられ、やがてその困難な出来事が大きな喜びへと変えられる日がやって来るのです。

保育者を志す皆さんが、柳城での 2～4 年の学びの日々を過ごす中で、様々な出来事を通し

て、とりわけ困難な、避けて通りたいと思う出来事に遭遇した時、それを目標への一里塚だと認識して、しっかり向き合っていくことによって、目指す目標に到達できるのではないかと思います。クリスマスの星を見つめながら、皆さんの保育者への歩みを声援しています。

前期の礼拝から 6月11日

「エバが最初に蛇にそそのかされたからなの？」
司祭 後藤香織

先ほど読んだ、この創世記3章1～19節に出てくる登場人物を確認しましょう。アダムとエバと蛇、そして神様です。ここでの主人公はエバですね。聖書の内容を見てみましょう。

エバは、善悪の知識の木の実について、神様から「触れてはいけない、食べると死ぬから」と言われているということを、蛇に話します。しかし、蛇は「決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知ることができるようになる」と言ってエバをそそのかします。その結果、エバは実をとって食べ、アダムにも食べさせました。

同じ日に、神様はエバとアダムの姿を見つけ、エバに対し「何ということをしたのか」と問いかけます。エバは「蛇がだましたので、食べてしまいました」と答えます。これは、私は悪くない、蛇のせいだということですね。

これらの一連の出来事の結果、人間は善悪を知る者となったと聖書には書かれています。では、善と悪とは何でしょうか？善とは、良いことを指しますね。つまり、人が人として大切にされることです。そして、悪とは人が大切にされないことを言います。

また、その一方で、人は常に自分を中心において物事を考えています。自分にとって都合の良いことを善として、都合の悪いことを悪と決めています。それと同時に、私たち人は一人では生きていくことはできず、周りの人たちとの交わりの中で命が与えられているのです。

エバの話にもありますように、私たちは間違いを起こすことが必ずあります。自分がとった判断や決断がうまくいかなかった時、責任逃れや人のせいにしたくなることもあるかもしれませんが、そうではなく、自分が決断したことを責任をもって歩むことが大切です。

エバは、自分が間違っていたことを神様に言うことができませんでした。そして傍にいたアダムは、エバを止めなければいけない立場であったにもかかわらず、できませんでした。これらを私たちの生活に当てはめてみると、男性と女性が平等に支え合うことが大切だと言えます。

最後に、皆さんにひとつの問いかけをして話を締めくくりたいと思います。あなたの身の回りで、当たり前と思うことを「人として大切にしているのかどうか？」という視点をもって見直してみませんか。

（文責：保育科教員 柴田）

後期の礼拝から 9月24日
「子どもがいるところに生まれる笑い」
教授 村田康常

聖書：「創世記」21章1節～6節

お話するのは結局自分と自分の周囲の人のことです。人間関係が苦手で孤独でいることが好きだった自分が、家族をもち、笑えるようになったのは、苦手だったはずの人との出会いやつきあいを通してでした。特に、子どもが嫌いで苦手だったはずの自分が、子どもとの出会いを通してやっと人と一緒にいて素直に普通に笑うことができるようになった、その時のことをお話したいと思います。

中学生・高校生から大学生にかけての時期、私は人と一緒にいること、特に子どもが苦手でした。そんな自分が、家族をもち、笑えるようになったのは、苦手だったはずの人との出会いやつきあいを通して、とりわけ子どもとの出会いを通してでした。学生のときに、自分は本当は子どもが大好きなんだ、と気づかされるような大事な出会いがいくつかありました。中でも自分にとって一番大きかったのは、自分の子どもが生まれたときでした。娘が生まれたのは、大学院で書いていた博士論文を提出する日の早朝でした。

ちょっと難産だったので、生まれたあと娘は産声をあげて泣いたあとで、疲れ切ってこんこんと眠っていました。あかりに照らされたその寝顔を見ながら、こんなに小さな命が自分たちのせいで地上に、私と妻のもとにやってきたんだ、ということにびっくりしてとまどっていました。そうしたら、娘が、頭の横でにぎっていた両手を開いて、閉じたのです。指を、開いて、閉じた。私が見ているすぐ目の前で、さっきまでおなかのなかにいた赤ちゃんが、すごく頑張って長い出産を経てやっと落ち着いて、今、そこで眠っている。その赤ちゃんが、ただ、にぎっていた両手を少し開いて、ゆびを少し動かして、また握った。

それだけでしたが、それを見て、涙が止まらなくなりました。

多分、ちゃんと涙が出て泣いたのは、そのとき、10年以上ぶりだったと思います。

そして、私は後ろで横になっていた妻に、「この子が今、眠りながら手を開いて、手を閉じた。」と泣きながら言いました。きっと何のことか分からなかっただろうけど、妻は一生でいちばんがんばった夜を最後までやりきった、という顔で笑いかけてくれました。赤ちゃんを産んで全身全霊の力を使い尽くして、それでも赤ちゃんが眠っているそのすぐ横で笑うお母さんの笑いは、それこそ地上のものではありません。天からの笑いです。

聖書を読んでいても、私たち男性は、たとえばアブラハムの老いた妻サラがやっと産まれた自分の息子を「イサク」、つまり「笑い」と呼んだという旧約聖書の記述を解釈して、古代社会で族長の第一の妻だったが子どもを産めなかったサラが、かなり高齢になってからとうとう念願の子どもをもうけたので、それで喜んだのだといったことを言ったりしますが、そんなことは出産したあとの女性にとってはきっと、どうだっていいのだろうと思います。自分のおなかのなかで育った赤ちゃんが、たいへんな苦しみと大きなリスクをへて生まれてきて、腕の中にいる、おくるみにくるまれて横ですやすや眠っている、自分のおっぱいを飲んでいる、ということが、きっとそのまま、この地上を超えたような笑い、宇宙規模にでっかい喜びの中で咲く笑いを生んでいるのだと思います。

子どもが存在してくれることで生まれる笑い。

どの赤ちゃんも、最高の笑いといくら流してもいい涙をもたらしてくれるような存在として生まれてくる。その恵みをきちんと受けられるかどうかは、大人の側の問題です。生まれてくる子どもは、みんな、最高の笑いと涙をもたらしてくれるような存在です。そういう意味で、生まれてくる子どもは、みんな、イサクなんだと思います。

後期の礼拝から 10月15日
「村人と共に～痛みが情熱へ～」
アジア保健研修所（AHI）
研修生 チャン・レイさん

アジア保健研修所（AHI）さんからゲストをお招きする本企画も5年目になりました。年一度の機会ですが、毎回、貴重なお話を頂き、心から主に感謝です。

今回は、カンボジア国籍でクリスチャンのチャン・レイさんをお迎えしました。通訳はAHIスタッフの中島隆宏さんです。

チャンさんは国際開発救援財団（FIDR）の職員で、現在は、カンボジア事務所に勤務しておられ、州や郡の保健課職員の能力育成とともに、母親グループ作りを通して5歳児未満の子どもたちの栄養改善活動に取り組んでみえます。

その現状と、ここまでに至る彼女の道のりとが、礼拝の奨励及び礼拝後の「柳城タイム」の中で熱く語られました。それらの要点を以下に記します。テーマは「村人と共に ～痛みが情熱へ～」。その根底に流れる聖書の言葉は、**「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。（フィリピ4:13）」**

①高校卒業後から働いていた中国資本の工場を辞めて、キリスト教会の英語の教師になったことで給料が大きく下がったが、教会に通う中で、お金よりも人々への奉仕のために働くことが自分にとっては大切であると私は気づかされた。

②看護大学在籍中に病院で子どもたちが亡くなるのを目の当たりにして、私はとても苦しんだ。そして、病気の人々の命を救うためには、治療も大切だが、それよりも予防の方が優先されると考えるようになった。

③失業中、私は多くのことに悩まされ、「神様、あなたの次のご計画は何ですか？」、「どうすれば私はそれを実現できますか？」と問いかけた。そして**「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。（フィリピ4:13）」**とのみ言葉が与えられた。私は待つことを学び、神のご計画の中にあることを知って、心穏やかになった。その結果、「強くしてくださる神によって、私は何でもすることができる」という確信が持てるようになった。

④私はカンボジア保健省と協力してファシリテーターとして働き、母親と子どもの健康を改善するために、母親らに健康と栄養に関する知識を伝え、意識を高める活動をしている。ところが、親の半数以上が乾季になると州外に出稼ぎに行ってしまう。残された子どもの面倒を見るのは祖父母であるが、彼ら彼女らは、あの過酷だったポル・ポト政権時代の世代なので、教育や保健衛生の分野における知識が乏しい傾向にある。私は祖父母らの子育てをもサポートしようと努力しているが、読み書きができない人もいて、その道のりは大変険しい。でも、私は決してあきらめるつもりはない。ひたすら忍耐強く取り組むのみである。

⑤今回、AHIの研修に参加することで多くの経験と新しい知識を得たが、私が最も強いインスピレーションを持ったのは広島訪問から学んだ「平和への構築」だった。被ばくしても生き続ける樹木や残された建物は私に大きな希望を与えてくれた。私は身近なところから平和を求め、家族や職場に広げたいと思う。

⑥すべての子どもは白い紙のように純粋なものとして生まれるのに、中には暴力を受けたり親から離されたりして、十分な保育が受けられないケースもある。一緒に種を蒔こう。そうすれば将来に実りがあり、あなたの社会は愛で包まれるはずだ。愛と平和をあなたの周りの子どもたちと分かち合おう。そして、平和の作り手になろう。

（文責：総務課 加藤）

後期の礼拝から 10月22日
「なぜ、ハムスターを飼い続けるのか」
准教授 榎戸裕子

今、私は、研究室でハムスターを飼っています。教職実践演習の学生10名も飼育に関わっています。では、なぜ、名古屋柳城短期大学でハムスターを飼育しているのか、お話をしたいと思います。

私は、この大学を卒業し、公立幼稚園で４０年間、幼児教育に携わってきました。ある園に園長として着任した時、園の周りは自然に恵まれているのに、保育後あまり自然と関わって遊ぶ親子の姿が見られませんでした。また、感情をコントロールすることが苦手な子もいるなと感じました。

そこで、保護者の方が、身近な自然をどのように捉えているのか「身近な自然との関わり」についてアンケートをとり把握したところ、ほとんどの方は、保護者自身が子どもの頃の飼育や栽培の経験は、「思いやり」や「命」の大切さを育んだと答えているにもかかわらず、現在飼っているのは、水辺の生き物や昆虫が多く、ウサギやイヌなど体温を感じる生き物はごくわずかだったのです。

このような実態から、子どもたちや保護者も、園で生き物や動物に関わることで、生き物を身近に感じ、人として生きていく上で必要な「思いやり」や「命」を感じることができるのではないかと考え、継続動物飼育を始めました。

子どもたちの発達段階に合わせ、３歳児は身近で探しやすいダンゴムシ、４歳児は変化が分かりやすいザリガニやアオムシ、５歳児は、「命」あるものの温かさを感じることができるウサギの継続飼育をすることにしました。

５歳児のウサギは、部屋にウサギの家を作り、生活をともにして、「どうしたら喜ぶのかな」「もし、自分だったら」などを考えながら世話をしてきました。保育者は、子どもたちの気付きを大事にし、話し合うことで、土日や長期休園時の里親制度が生まれました。

４歳児は、アオムシが近くに寄って来るように、親子でプランターにパセリを植えたり、生き物ゲームを親子で遊んだりして、生き物を身近に感じることができるようにしてきました。

３歳児は、親子で作った“宝箱”（牛乳パックを半分に切り手持ちを付けたバック）を持って、保育者も一緒になって、ダンゴムシ探しに夢中の日々でした。

継続動物飼育を始めて３年目のこと、他園からダンゴムシの苦手な保育者が転勤してきました。子どもたちはダンゴムシを捕まえてきては、その保育者に見せていました。最初は嫌な顔でしたが、子どもたちが毎日のように「可愛いよ」と連れてくる姿に感化され、一緒に餌やりをしたり、脱皮をする姿を見たりして、ともに感動を味わうようになっていきました。その後、自宅でダンゴムシを飼うようになり、好みの餌を子どもたちに知らせたり、迷路作りに挑戦したりして、生態の面白さに夢中になっていきました。気が付いたら、ダンゴムシのことを「かわいい」と思えるようになったと話してくれました。

子どもたちは、この継続動物飼育が深まるにつれ、動物だけではなく、自然に友達の表情や仕草を見とり、友達の心を思いやる言葉と認め

合う穏やかなクラスの雰囲気が見られました。

この５年間の継続動物飼育から、保育者は、生き物や動物を上手に飼育するだけではなく、保育者自身が生き物や動物に興味・関心をもって親しむ姿や生き物や動物の気持ちを察して代弁しながら丁寧に世話を続けようとする姿を見せることで、子どもたちが「思いやり」を育み、「命」の大切さに気付くことに繋がることを確信しました。

だから、学生たちに、「命」と触れ合う環境を提供できる保育者になってもらいたい、生き物や動物に親しみ、愛情を注ぐ体験を少しでもしてもらいたいと思い、大学でハムスターを飼い続けています。生き物や動物と触れ合うことで、子どもたちが生き物を捕まえて見せにきても、嫌がらずに一緒になって興味・関心をもって、丁寧に世話ができる保育者になってくれると信じています。

私は、この大学で学んだことを基盤にし、園児を愛し、保護者を愛し、生きるもの全てを愛してきました。私の生活信条、生きるもの全てに『愛をもって仕えよ』は今も変わりありません。

後期の礼拝から　11 月 12 日
「柳城生の皆さんへ！合言葉は『ニコニコ！ハキハキ！キビキビ！』」

教学部 学生支援課
部長　大澤 弘毅

2 年生の皆さん就活お疲れ様です。就職が決まっている皆さんおめでとうございます。
専攻科への進学が決まっている皆さんは進学おめでとうございます。

現在就活中の皆さんは、決まっている学生を見ると焦る気持ちを持っている人もいるかもしれません。でも皆さんの在学している短大は柳城です。卒業生の頑張りもあって公立、私立問わず、幼稚園、保育園、こども園、施設等保育現場からの信頼はとっても厚いです。

必ず皆さんの思いのある就職先に就職できます。というか就職していただきます。アドバイザー、就職課のみならず柳城全体でサポートしますので、安心して就活に専念してください。

１年生の皆さんは後期から就職対策講座が始まり、来週 11 月 18 日からは初めての幼稚園実習です。少しずつ進路を意識し始めていることと思います。柳城は想像以上に大変な短大だったなあと思っている人も多いとは思いますが、この２年間の頑張りが皆さんにとっていい結果に繋がるのは間違いないです。へこたれないでください。そのために先生方が支えます！職員は各部署からサポートさせていただきます。

就職が決まっている皆さんも、それはそれで今後のことを不安に思っていることも多いのではないでしょうか。社会人になることへの漠然とした不安もあれば、先生としての保育の知識、理論、実践力が私にはちゃんと身についているのか、子どもたちと信頼関係を結ぶことができるか、保護者とうまくコミュニケーションがとれるのか、モンスターの保護者がいたらどうしよう、園長先生、主任の先生、先輩や同僚の先生との人間関係はうまくいくのかなどなど考えると心配が尽きないと思います。

何年か前に学生に「就職したい園を決めるポイントは？」というアンケートをとったことがあります。ダントツで「先生同士の人間関係の良い園」が１位でした。それは今も変わらないようです。職場の雰囲気、人間関係を気にかけるのは業種に関係なく同じです。

その善し悪しを園見学などで見て、就職先を絞って行く人もいるようですが、残念ながらその職場に実際に身をおいてみなければホントのところは分からないことが多いです。自分自身にとって合う雰囲気、合わない雰囲気があるかもしれませんが、誰が見ても人間関係が良くない職場はそうそうないと思います。そもそも職場は仕事をするところで仲良しクラブではありません。

学生の皆さんには、本当は２年間しっかり学んで自分自身の保育観、保育の中でも得意とするところを確立して、自分が共感できる保育方針、教育内容を大切にしている職場を選んでもらいたいと思っています。

ただ、職場の人間関係の良し悪しが気になることは重々理解できますので、ではどうしたらよいのか。それは『ニコニコ！ハキハキ！キビキビ！』を意識して日々の仕事にのぞむことです。柳城生の就職活動の際のキャッチフレーズです。

“ニコニコ”の笑顔、“ハキハキ”とした応答、“キビキビ”とした行動は、特に初対面の相手には良い印象を与え、コミュニケーションを広げ、信頼関係を構築するきっかけとなります。これさえ意識していれば、人間関係で辛いことがある可能性はかなり低くなります。そればかりか良いことがたくさん起こります。私はそう確信しています。

身近にいる柳城の卒業生を見てください。Ｅ先生　まさに見たまんま！ニコニコ！ハキハキ！キビキビ！が思いっきり３拍子揃ってます。就職課のＨさんとても優しい笑顔です。皆さんに分かりやすくハキハキお話しされますし、キビキビとお仕事をされます。入試広報課のＳさん、笑顔の明るさは学生時代からです、オープンキャンパスでの学生への指示もハキハキとして、自らもキビキビ動いていますよね。皆さん悪い印象を持つ人はそうそういないと思います。

人間関係のみならず辛いことが今後全くない人生を送ることはないと思います。でも皆さんがこの「ニコニコ！ハキハキ！キビキビ！」を心に留めて前向きに行動すれば、神様はその試練を乗り越える後押しをしてくださるものと思っています。

柳城生は『ニコニコ！ハキハキ！キビキビ！』です！

創立 121 周年を迎えました

晴天の恵みのもと、2019 年 11 月 1 日（金）に柳城学院創立 121 周年を迎えました。

創立記念礼拝では、特別講演として名誉教授である尾上明子先生による「創立者～私たちのヤング先生～」と題し、ご講演をいただきました。

柳城学院の創設者のマーガレット・ヤング先生がお生まれになった、カナダのオンタリオ州のヴィエンナ（Vienna）の風景や、当時の柳城保姆養成所の保育者の写真をスライドでわかりやすく話をしてくださいました。写真で拝見するヤング先生は、大変お美しくどのお姿も気品が漂っていました。尾上先生がヤング先生のご意思やお人柄に触れて伝えてくださることは、時代を超えこの柳城学院が大切にしてきたことでした。改めてヤング先生がとても身近に感じた瞬間でもありました。尾上先生が今回のテーマについて「私たちのヤング先生」と強調されていたことに共感するとともに、今後も私たちは「愛を持って仕えよ」の建学の精神のもと、ヤング先生のような豊かで温かな人間性をもった保育者の養成に努めてまいりたいと心に刻んだ講演会でした。

（文責：保育科教員 大崎）

□理事長 ペテロ 渋澤 一郎主教による式辞

□第2部 創立 121 周年記念 特別講演
「創立者～私たちのヤング先生～」
名誉教授 尾上 明子先生

□創立者記念墓地礼拝
日本聖公会中部教区 共同墓地（八事霊園内）

【クリスマス展を開催しています】

【11 月 19 日(火)～2020 年 1 月 10 日(金)まで 】
場所　本学ラーニングコモンズ
　　マタイ教会礼拝堂入り口

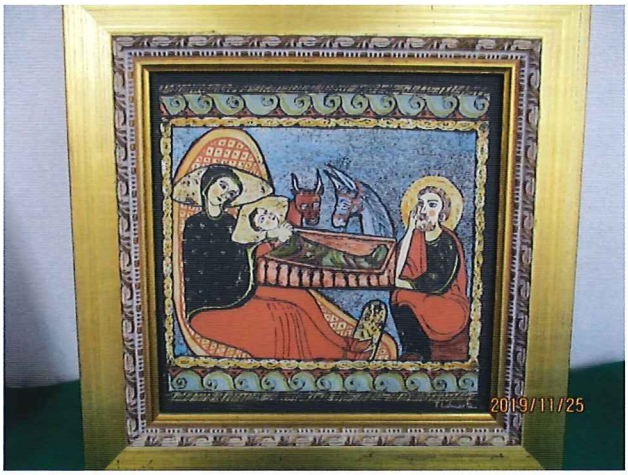
現在、学内ではクリスマス展を行っています。キリストの降誕人形や、クリスマスにまつわる人形類を展示していますので、ぜひ皆さん足をお運び下さい。

中世に盛んに作られ始めた降誕人形は、すでに 8 世紀にはローマの教会に存在していたと言われています。これらの人形は、イギリスではクリブ、ドイツではクリッペ、フランスではクレーシュ、スペインではベレンなどと呼ばれ、教会や家庭でイエス・キリストの誕生を偲ぶものとして置かれます。キリストの降誕を祝う心が、この人形たちに託されています。(マタイ教会展示より一部抜粋)

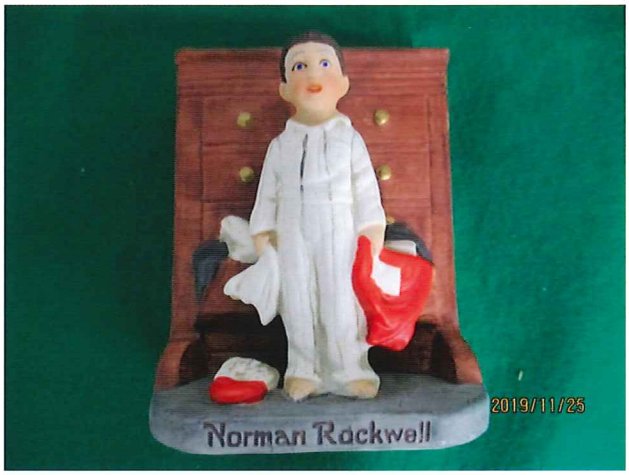
□降誕人形　ベツレヘム修道院(フランス)

□煙出し人形(ドイツ)

□聖家族と馬屋のキリストの陶板画
(スペイン)



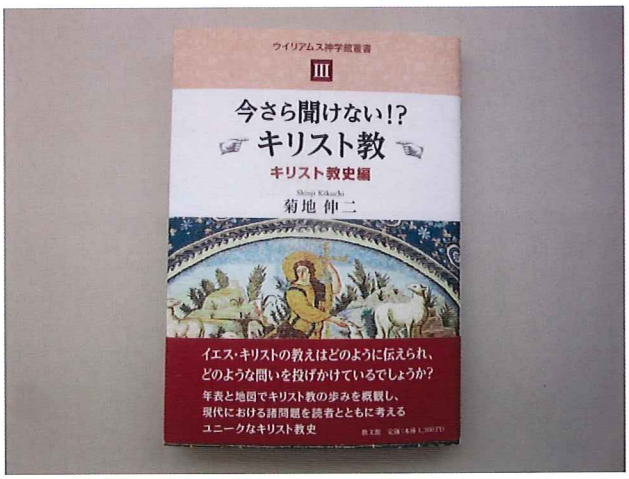
□ぼく、サンタクロースの正体を見てしまった！
(アメリカ)



口本学玄関に飾付のクリスマスツリー

【新刊の紹介】

菊地伸二先生の著書が教文館から出版されました。



イエス・キリストの教えがどのように伝えられ、どのような問いかけを投げかけているでしょうか？　ユニークなキリスト教史です。

「いまさら聞けない！？キリスト教　キリスト教史編」(教文館)1300円＋税

(文責:学長　長縄年延)

2019 年 12 月 18 日発行

ちゃぺるにゅーす　第 32 号

発行所：名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町 2-54
発行者：キリスト教センター
編集担当：柴田智世